立科町

ARAJOUMINE

新城峰遺跡

防災・安全交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
国道 254 号　立科町　宇山バイパス

２０１６．３

長野県佐久建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

新城峰遺跡全景（東上空より）

新城峰遺跡出土遺物

はじめに

国道 254 号は長野県と首都圏を結ぶ幹線道路であるとともに、地元にとっては重要な生活道路でもあります。

今回、立科町宇山バイパス建設に伴って新城峰遺跡の発掘調査が行われました。本書はその発掘調査の成果を報告するものです。

蓼科山の裾野に位置する立科町は、近世には中山道の芦田宿がおかれ、笠取峠の松並木は当時の面影を今もとどめています。これをさかのぼる中世には、遺跡の所在する山部には津金寺が栄え、境内に多くの石造物がのこされています。

新城峰遺跡は、遺跡の名が示すように中世の山城に関係する遺跡ではないかと考えられていましたが、調査の結果、山城ではなく、中世の竪穴状建物跡などからなる集落跡であることがわかりました。立科町でははじめての中世集落跡の調査例となりました。

この集落は中世後期の室町時代の短期間に営まれた集落である可能性があります。また、わざわざ周囲を谷に囲まれた尾根の斜面につくられていて、周辺に広がる平坦地から逃れているようにもみえます。世情不安定な時代に生きた人々の生活の一端を示すものといえます。

調査内容の詳細につきましては、本書をご覧いただければと思いますが、今回の調査によって得られた資料と情報が、今後、多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘から整理作業、本報告書の刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただきました長野県佐久建設事務所の方々、長野県教育委員会や立科町教育委員会、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆様、そして発掘作業・整理作業に従事協力いただいた多くの方々に、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

例言

1　本書は、長野県北佐久郡立科町に所在する新城峰遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、国道254号宇山バイパス建設に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。

3　遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』31で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

4　本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000）、立科町地形図（1：5,000）をもとに作成した。

5　本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は、世界測地系を用いている。

6　発掘調査にあたっては、以下の機関に業務委託した。（敬称略）
測量・空中写真撮影：（株）写真測図研究所
自然科学分析：（株）パレオ・ラボ

7　発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表する。（敬称略）
藤澤良祐、西藤五郎、斉藤恵、西藤泉、立科町教育委員会、長野県文化財保護審議会史跡・考古資料部会（小野昭、笹澤浩、会田進）

8　発掘作業・整理作業の担当者は第1章に記載した。

9　本書は、調査研究員廣瀬昭弘が執筆・編集し、調査部長平林彰、調査第1課長岡村秀雄が校閲した。

10　本書に貼付したＤＶＤには、以下の内容を収録した。
本文ＰＤＦファイル、写真データ、自然科学分析報告書

凡例

1　遺構番号は、遺構種ごとに付してある。

2　本書に掲載した実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。

（1）遺構図
調査区全体図1：600、竪穴状建物跡・掘立柱建物跡・溝跡1：80、土坑・土器集中・礫集中1：40

（2）遺物図
土器・陶磁器1：4、小型石器2：3、磨石・敲石等1：3、台石等1：4

3　基本層序及び遺構埋土の色調は「新版　標準土色帳」による。

4　実測図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。

（1）遺構図
地山

（2）遺物図
①土器　黒色処理　　陶磁器断面　　②石器　磨面・砥面

5　遺構実測図中の遺物記号は、以下のとおりである。
●　土器　　■　石器

目　次

巻頭図版
はじめに
例言・凡例
目次

第１章　調査に至る経緯
　第１節　事業の概要と保護協議…… 1
　　１．宇山バイパスの事業計画…… 1
　　２．埋蔵文化財の保護協議と調査…… 1
　　３．文化財保護法の手続き…… 2
　第２節　発掘作業と整理作業の体制…… 2
第２章　調査の経過
　第１節　発掘作業の経過…… 3
　　１．発掘作業の方法…… 3
　　２．日誌抄…… 4
　第２節　整理作業の経過…… 4
　　１．整理作業の方法…… 4
　　２．日誌抄…… 4
第３章　遺跡の環境と概要
　第１節　遺跡の地理的・歴史的環境…… 5
　第２節　遺跡概要…… 5
　　１．遺跡概観…… 5
　　２．調査の概要…… 7
　　３．基本層序…… 7
第４章　遺構と遺物
　　１．竪穴状建物跡…… 9
　　２．掘立柱建物跡……12
　　３．土坑……13
　　４．溝跡……17
　　５．土器集中……17
　　６．礫集中……19
　　７．その他……19
　　８．遺構外……22
第５章　科学分析……26
　　１．放射性炭素年代測定
第６章　総括……27
写真図版
抄録

第１章　調査に至る経緯

第１節　事業の概要と保護協議

１．宇山バイパスの事業計画

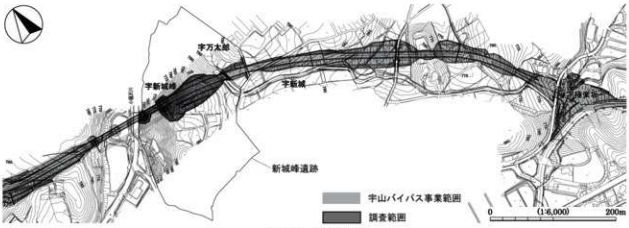
国道 254 号は都心から埼玉県・群馬県を経由して長野県松本市へ通ずる幹線道路であるとともに、立科町西部では重要な生活道路となっている。立科町内の現道は幅員が狭いうえに急カーブも多く、通行の支障となっている。宇山バイパスはこのボトルネックを改善するために長野県佐久建設事務所が計画している道路改良である（第１図）。

２．埋蔵文化財の保護協議と調査

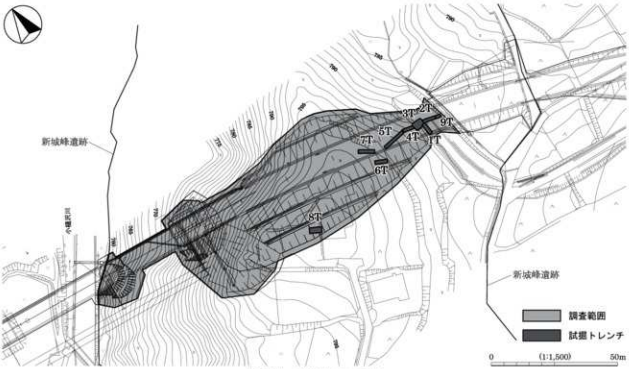
新城峰遺跡の所在する立科町大字山部字新城峰地籍は長野県佐久建設事務所による国道 254 号宇山バイパス建設予定地にあたっており、事業の進捗に合わせて、長野県佐久建設事務所（以下　佐久建）、立科町教育委員会（以下　町教委）、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下　県教委）による協議が続けられてきた。

平成 25 年度、事業が当該地に及ぶこととなったことから、町教委が平成 25 年 11 月から平成 26 年１月にかけて試掘調査を実施した。試掘調査は事業地の尾根に９本のトレンチを設定して行われ、調査の結果、尾根東側斜面で中世の内耳鍋片が出土し、尾根頂部付近では低い土塁状の高まりが確認された（第２図）。

この調査状況に基づき、平成 26 年１月 15 日、事業主体の佐久建と町教委、県教委、長野県埋蔵文化財センター（以下　埋文センター）の四者による協議がもたれた。協議では試掘調査の結果を受け、新発見の「新城峰遺跡」として登録すること、国道 254 号宇山バイパス建設にあたっては、遺跡を記録保存とすることが決定した。町教委では調査体制が整わないため、埋文センターが調査を受託して実施することとなった。



第１図　事業計画



第２図　試掘調査の概要

３．文化財保護法の手続き

本遺跡の文化財保護法に基づく届け出等の手続きは以下の表のとおりである。

土木工事通知（法 94 条）	県教委勧告（法 94 条）	発掘届（法 92 条）	県教委指示（法 92 条）	埋蔵物発見届	文化財認定
文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付
25 佐建第 380 号 （H26.3.17）	26 教文第 8-1 号 （H26.4.7）	26 長埋第 14-3 号 （H26.4.30）	26 教文第 6-3 号 （H26.5.13）	26 長埋第 15-9 号 （H26.11.13）	26 教文第 20-72 号 （H26.12.1）

第２節　発掘作業と整理作業の体制

本遺跡に関する調査・整理体制は以下の表のとおりである。

	H26	H27
所長	会津敏男	会津敏男
副所長兼管理部長	多城　哲	多城　哲
管理課長	村山清治	山本希一
管理課長補佐	山本希一	望月英夫
調査部長	大竹憲昭	平林　彰
担当課長	岡村秀雄	岡村秀雄
担当調査研究員	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘
	大澤泰智	

第２章　調査の経過

第１節　発掘作業の経過

１．発掘作業の方法

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則って実施している。

⑴　遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、新城峰遺跡（あらじょうみねいせき）、遺跡記号：ＤＡＭである。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るためアルファベット３文字で表したもので、１文字目の「Ｄ」は長野県内を９地区に分割した佐久地区を示し、２文字目・３文字目は遺跡名のローマ字表記の一部から採ったものである。

⑵　遺構名称と遺構記号

遺構記号は、種類毎、検出順に付した。今回の調査で用いた遺構記号には以下の種類がある。

SB：竪穴状建物跡、ST：掘立柱建物跡、SK：土坑、SD：溝跡、SQ：土器集中、SH：礫集中。

⑶　調査区（グリッド）の設定と呼称

国土地理院の平面直角座標第Ⅷ系の原点（X = 0.0000、Y = 0.0000）を基点に、200 の倍数値を選んで測量基準線を設け、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定した（第３図）。

大大地区は、200 × 200m の区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ…のローマ数字で表記。

大地区は、大大地区を 40 × 40m の 25 区画に分割し、北西から南東へＡ～Ｙのアルファベットで表記。

中地区は、大地区を８×８ｍの 25 区画に分割し、北西から南東へ１～25 のアラビア数字で表記。調査ではこの中地区を遺構測量等の基準・単位とした。座標値は世界測地系である。

第３図　グリッド設定図

(4)　遺跡の発掘

町教委の試掘調査結果を基に、立木の伐採に合わせて現地踏査を行い、その後重機による表土剥ぎを実施し、遺構検出･遺構調査を実施した。遺構の測量は、調査研究員及びその指導のもとに発掘作業員が行った。調査中の写真撮影は、６×７判カメラ、一眼レフデジタルカメラを併用して撮影した。調査区の全体写真は業者委託のラジコンヘリコプターを用いて撮影した。

(5)　遺跡の公開

現地調査期間中、８月５日に町教委主催の遺跡見学会を実施し、参加者の発掘体験も行った。９月29日には立科町文化財保護委員、たてしな歴史研究会会員の見学会、９月30日には佐久建の見学会を実施した。10月25日には地元町民を中心とした現地説明会を開催し、55名の参加者があった。開催にあたっては町教委山浦氏の多大な協力があった。出土遺物は平成27年１月に開催した埋文センター展示会「掘るしん」に展示公開した。また、２月22日にはたてしな町民歴史公開講座で調査の概要を報告した。

２．日誌抄

平成26年
６月10日　佐久建・町教委・埋文センター・伐採業者による現地確認
６月17日　立木伐採作業開始
７月22日　重機表土掘削作業開始
８月４日　発掘作業員作業開始
８月５日　立科町主催遺跡見学会・発掘体験を開催
８月６日　尾根頂部土塁状高まり部分のトレンチ調査
９月29日　立科町文化財保護委員、たてしな歴史研究会遺跡見学
９月30日　佐久建　調査見学・研修
10月17日　空中写真撮影を実施
10月25日　現地説明会を開催　参加者55名
10月31日　発掘作業員作業終了
11月４日　法面作業員作業開始　北西斜面のトレンチ調査
11月10日　法面作業員作業終了
11月13日　佐久建現地確認、用地引き渡し　調査終了

第２節　整理作業の経過

１．整理作業の方法

(1)　基礎整理作業

発掘作業年度に、記録類や出土遺物の基礎整理作業として、各種記録類の内容確認や修正を行い、台帳および遺跡・遺構の調査所見を作成。写真類は撮影内容等の点検、台帳作成の後アルバムに収納した。出土遺物は洗浄・注記を行い、種類別に仮収納した。

(2)　本格整理作業

報告書作成に向けた本格整理作業を平成27年度に実施した。出土遺物は分類・接合等を行い、器種や形態が把握できるものを報告書掲載遺物として選択抽出し実測・トレースを行った。図面類は、基礎整理作業の修正図をもとに、必要に応じて２次原図を作成し、デジタルトレースにより図版を作成した。遺物図版もトレース図をパソコンに取り込み版組を行った。

(3)　資料の収納

出土遺物、実測図面、写真などの記録類は、報告書刊行後の保管先変更に備え、分類収納した。

２．日誌抄

平成27年
６月３日　整理作業開始、各種記録・図面類の整理開始
６月26日　遺物接合・復元、実測作業開始
７月１日　図面類デジタルトレース開始
７月23日　遺物写真撮影
12月17日　印刷・製本業者決定
平成28年
３月18日　報告書刊行

第3章　遺跡の環境と概要

第1節　遺跡の地理的・歴史的環境

立科町は長野県の東部、北佐久郡の西部に位置する。八ヶ岳火山列の最北端にある蓼科山の北山麓に広がる町で、南北の長さ26.4km、東西の長さ最大9.9kmという細長い町である。町の地形は大きく南側の蓼科山の噴出物などによる火山性高原地帯と、その北方に広がる蓼科山裾野や八重原台地と呼ばれる平坦な地区とに分けられる。新城峰遺跡は、長和町との境をなして北に延びる蓼科山裾野と八重原台地との境付近に所在する（第4図）。

立科町では遺跡の発掘調査例が少なく、原始から古代・中世にかけての遺跡の状況に関しては詳らかでない部分も多い。過去の調査例をみると、芦田の大庭遺跡で縄文時代前期から中期と奈良・平安時代の集落跡が検出されている。同じく芦田の龍田遺跡では中世芦田氏の菩提寺光徳寺跡の伝承地で寺院跡と考えられる遺構が検出されている。また、蓼科山山麓の雨境峠付近には古墳時代の祭祀跡の遺跡が古道に沿って幾つも存在し、剣形や勾玉・管玉など多彩な遺物が出土している。

中世では、新城峰遺跡の南東900m程の山裾に位置する古刹津金寺には、多くの石造物が残されている。長野県宝に指定されている鎌倉時代の滋野氏宝塔三基の他、数えきれないほどの五輪塔と宝篋印塔がある。

この他、近世中山道の笠取峠の松並木は長野県の天然記念物に指定されている。

新城峰遺跡周辺では、浅い谷を隔てた東側に矢原遺跡(128)が隣接する。縄文時代の石鏃が採集されているが、当宇山バイパス事業に伴う試掘調査では遺構・遺物とも検出されず、遺跡の実態は不明である。また、南側の石川集落内には荒城遺跡(124)があり、中世のカワラケが採集されたとされる。小桶沢川を挟んだ北西側には二反田道下遺跡(163)や、屋敷添遺跡(125)があり、古墳時代から平安時代にかけての土師器などが採集されたとされるが、いずれの遺跡も調査歴がなく、遺跡の詳細は不明である（第5図）。

第2節　遺跡概要

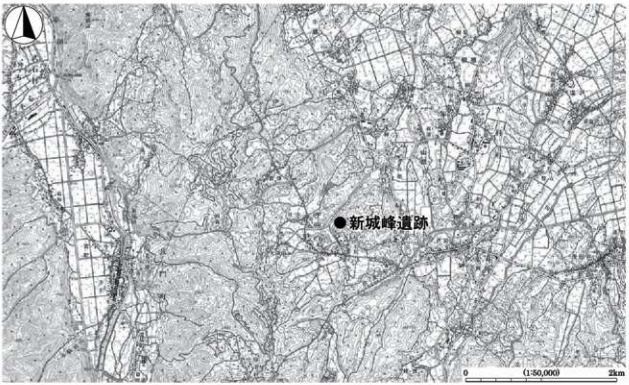
1．遺跡概観

遺跡は、立科町北西部の大字山部字新城峰に所在する。遺跡のある立科町北西部は、更新世前期小諸層群上部の宇山層と呼ばれる古い地層を基盤とするため、浸食による谷地形が発達している。遺跡周辺でも番屋川支流の小河川の浸食によって、平坦地と尾根が組み合わさった地形となっている。

新城峰遺跡西側には、蓼科山から延びる山裾に石川や立石などの集落が立地する平坦地があり、東側から北側にかけては番屋川の形成した平坦地との間に細かい谷に刻まれた尾根地形が広がっている（第5図）。

新城峰遺跡が立地する尾根もこうした尾根の一つで、標高は760～800mを測る。西側から南西側は小桶沢川の深い谷に画された急峻な斜面で、小桶沢川と尾根頂部との比高は約40mとなる。一方、南東から北東側にかけては浅い浸食谷が入り込む緩斜面で、東側の谷との比高は約14mである。

新城峰遺跡は、平成25年度に町教委が実施した試掘調査によって新たに発見された遺跡で、出土遺物や所在地の字名から中世の山城などに関係する遺跡と想定され、小桶沢川の谷に面した尾根一帯が遺跡範囲として登録されている。



第４図　遺跡の位置

No.	名称	所在地	種類	時代	備考		
032	西町北畑敷田遺跡	大字戸出字西町北畑敷田	散布地	縄文	戸出遺跡群		
034	上開敷１遺跡	大字戸出字上開敷	散布地		戸出遺跡群、033と同一遺跡と考えられる。		
035	上開敷２遺跡	大字戸出字上開敷	散布地		戸出遺跡群、034と同一遺跡と考えられる。		
036	神反り１遺跡	大字戸出字神反り	散布地		戸出遺跡群、(正明寺遺跡)		
037	神反り２遺跡	大字戸出字神反り上明寺	散布地	縄文	戸出遺跡群。		
038	上石打遺遺跡	大字戸出字上石打遺	散布地		戸出遺跡群。		
039	正明寺古墳	大字戸出字南開敷島	古墳		戸出遺跡群、墳丘墓		
040	西山ノ神遺跡	大字戸出字西山の神	散布地	縄文	戸出遺跡群。		
123	梅栄坂遺跡	大字戸出字梅栄坂	散布地				

No.	名称	所在地	種類	時代	備考
124	馬城遺跡	大字平山字馬城	散布地	中世	
125	開敷西遺跡	大字平山字開敷西	散布地		
126	矢原遺跡	大字平山字矢原	散布地	縄文	平成26年2月に範囲変更
159	角久保古墳	大字戸出字角久保	古墳		古墳墓
160	角久保遺跡	大字戸出字角久保	散布地		
161	上原遺跡	大字山部字上原	散布地		
162	大関山遺跡	大字平山字大関山	散布地		
163	二反田遺下遺跡	大字平山字二反田遺下	散布地		
181	**新城峰遺跡**	**大字山部字新城峰**	**散布地**	**中世**	

第５図　周辺の地形と遺跡分布

2．調査の概要

今回の調査対象地は、新城峰遺跡の立地する尾根の中央部を縦断するように東西約 150m、南北は最も広い尾根頂部付近で約 40m の範囲である。調査対象面積は 4,664㎡となる。

調査前の現況は、一帯が赤松の山林となっており、調査の開始にあたり樹木の伐採が必要であった。伐採は佐久建が発注し、平成 26 年度当初より実施する計画であったが、進入・搬出路の確保などの問題により遅れが生じ、6月より実施することとなった。

発掘作業も6月から伐採作業が遺跡へ影響を及ぼさないように現地立会を行いながら、調査準備や尾根頂部で確認された低い土塁状の高まり周辺の精査等を開始した。7月後半、北西急斜面部を除いた調査対象地の大半の伐採が終了したことから、重機による表土剥ぎを開始し、8月上旬から作業員を雇用して遺構検出などに着手した。

当初、中世の山城に関係するのではないかと想定された尾根頂部の平坦部の低い土塁状の高まりは、精査・トレンチ調査の状況や旧地権者への聞き取りなどから、現代の薬用人参耕作に伴う盛土と判明し、中央の平坦部には畝状の跡も確認された。

一方、尾根頂部から東側斜面上部では、中世の竪穴状建物跡や掘立柱建物跡などの遺構が検出され、10月末までに遺構調査を終了し、その間、地元住民向けの現地説明会を開催した。

なお、尾根北西側の急斜面部及び調査範囲西端の小桶沢川に面した低位部については、安全面を考慮し法面掘削作業員による調査とし、11月上旬から中旬にかけて樹木の間をぬって5本のトレンチ調査を実施した。調査の結果、急斜面・低位部では遺構が確認されず、遺物も斜面上部の表土で尾根頂部から流れ込んだと判断される内耳鍋片がわずかに出土したのみであったため、面的調査は不要と判断し、トレンチ調査でこの範囲の調査を終了した。

以上、新城峰遺跡の調査では、当初想定された中世山城に関係する遺構は認められなかったが、尾根頂部から東側斜面で中世後期室町時代の竪穴状建物跡や掘立柱建物跡などで構成される集落跡が検出された（第6図）。

3．基本層序

調査対象地の基本層序は以下のとおりとなる（第6図）。

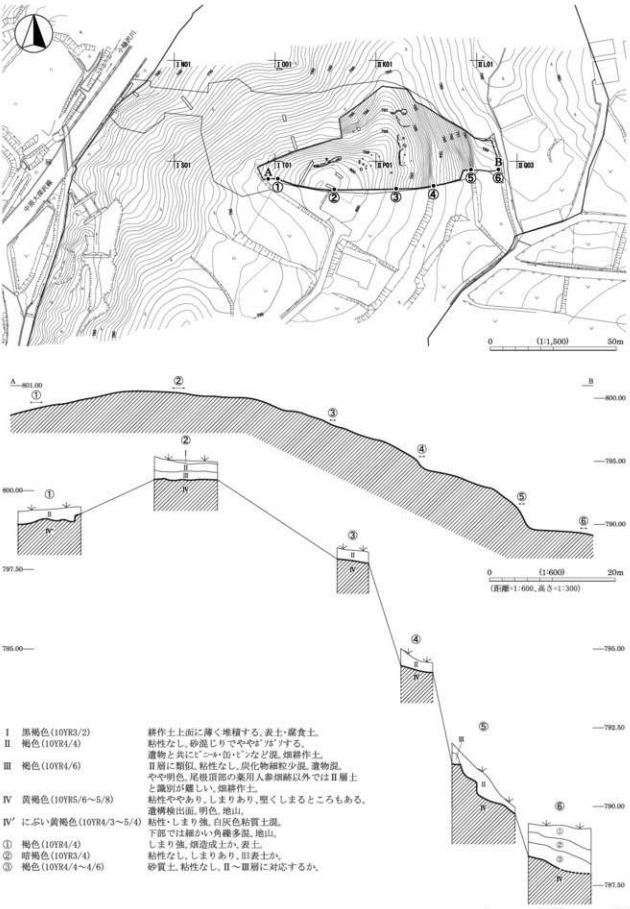
Ⅰ層：10YR3/2　黒褐色土。表土・腐食土で、薬用人参畑跡の畝の間や根切り溝の上部に認められる。

Ⅱ層：10YR4/4　褐色土。薬用人参畑の旧耕作土。粘性なく、砂混じりのボソボソしたシルト質土。ビニールや缶・ビンなどが混入している。遺物を含む。

Ⅲ層：10YR4/6　褐色土。Ⅱ層に類似し、粘性なく細かい炭化物が少量混じる。尾根頂部の薬用人参畑跡以外ではⅡ層の畑耕作土と識別が難しい。遺物を含む。

Ⅳ層：10YR5/6　黄褐色土。地山の土層で、Ⅲ層より明るく、しまりがあり、粘性がややあり、堅くしまるところもある。炭化物を少量含む。遺構検出面である。

調査では上記のように基本土層を把握したが、Ⅰ層からⅢ層は、基本的に地山となるⅣ層黄褐色土の上に堆積した表土層や旧耕作土である。Ⅱ層やⅢ層中には中世の遺物も含まれるが、現代のビニールなども含まれている。旧地権者への聞き取りによると尾根頂部は薬用人参畑、東側斜面一帯もレンギョウなどの花卉栽培用の畑として使用していたとのことである。もともと遺跡は尾根となっているため、土層の堆積は少ないうえに営農によるかく乱や斜面下部への流出などにより本来の遺物包含層は残存していない状況といえる。

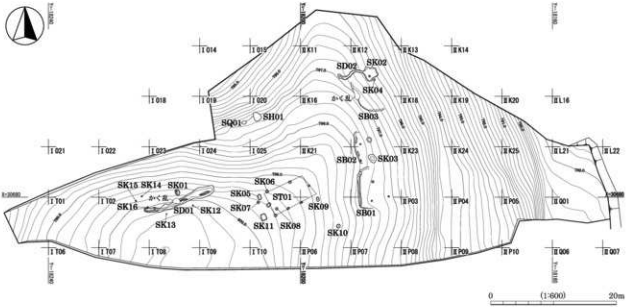


Ⅰ　黒褐色(10YR3/2)　耕作土上面に薄く堆積する、表土・腐食土。
Ⅱ　褐色(10YR4/4)　粘性なし、砂混じりでややざらつする。遺物と共にビニール・缶・ビンなど混。畑耕作土。
Ⅲ　褐色(10YR4/6)　Ⅱ層に類似、粘性なし、炭化物細粒少混、遺物混。やや明色、尾根頂部の薬用人参畑跡以外ではⅡ層土と識別が難しい、畑耕作土。
Ⅳ　黄褐色(10YR5/6～5/8)　粘性ややあり、しまりあり、堅くしまるところもある。遺構検出面、明色、地山。
Ⅳ′　にぶい黄褐色(10YR4/3～5/4)　粘性・しまり強、白灰色粘質土混。下部では細かい角礫多混、地山。
①　褐色(10YR4/4)　しまり強、畑造成土か、表土。
②　暗褐色(10YR3/4)　粘性なし、しまりあり、旧表土か。
③　褐色(10YR4/4～4/6)　砂質土、粘性なし、Ⅱ～Ⅲ層に対応するか。

第６図　遺跡全体図・基本層序

第４章　遺構と遺物

調査では、尾根頂部から東側緩斜面の上部で竪穴状建物跡３軒、掘立柱建物跡１棟、土坑16基、溝跡２条、土器集中・礫集中各１箇所などの遺構が検出された（第７図）。以下、遺構ごとに記載する。



第７図　遺構全体図

１．竪穴状建物跡

竪穴状建物跡は尾根頂部からやや下がった東側斜面で、等高線に沿って並ぶように３軒が検出された。建物跡の東側は急斜面となり下段の狭い平坦部へつながる。

建物跡は斜面上部側を掘り込んで平坦部をつくりだした半地下式の建物跡と考えられ、斜面下部側は削平されて残存していない。長軸は等高線に沿う南北方向となると考えられる。建物内の施設は明確でなく、炉跡はなく、柱穴も不明瞭である。遺構の立地状況からみると竪穴状の掘り込みは斜面上部側の狭い範囲に限られると考えられることから竪穴状建物跡とした。

SB01　［第８・14図　PL２］

位置：東側斜面のⅡＫ22・ⅡＰ02グリッド。南北に３軒並ぶ建物跡の中で最も南側に位置する。

検出：遺構検出時に、地山よりやや暗い色調の土層が南北の溝状に広がるのを検出。溝状の部分より東側の斜面下側は地山が露出し、かく乱も広がる。

埋土：斜面上部側の壁際のみに埋土が残る。埋土は地山の黄褐色土よりやや暗いにぶい黄褐色土で、炭化物が少量混じる。

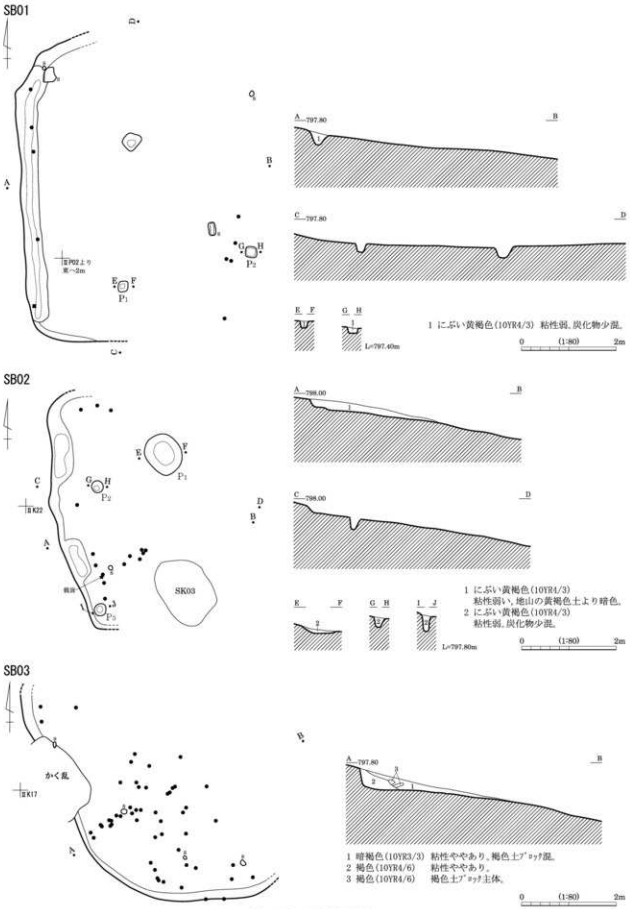
構造：建物跡の壁が残るのは西側の斜面上部側のみで、他の辺は削平などのため確認できない。規模は南北６～6.5m 程、東西は床面範囲と想定される平坦面の広がりから４～５m 程度と思われる。

長軸は等高線に沿うように南北方向を向く。床面は黄褐色土の地山面で貼床などはない。西側壁下に幅30～40cm程の周溝が廻るが、南北の辺には延びていない。建物内に炉跡はない。ピットが西側壁よりやや内側で３基検出され、Ｐ１は位置関係から柱穴の可能性が高いが、Ｐ２・Ｐ３は判然としない。

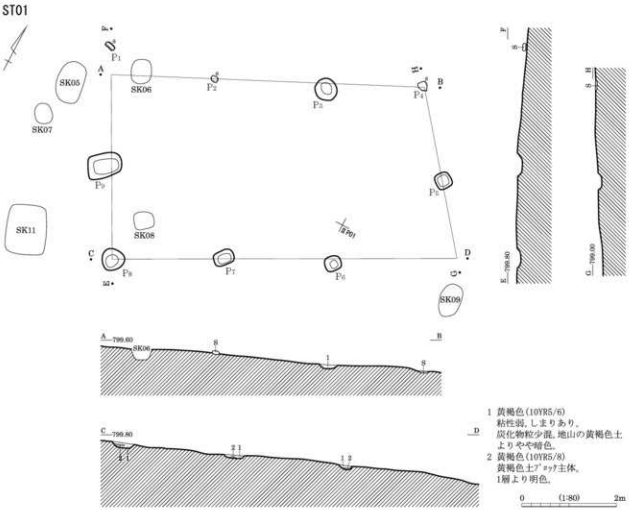
遺物：周溝内や埋土からは内耳鍋片10点、土師質皿片１点の小片が出土したのみである。第14図１は底径22cm程の内耳鍋底部片で、胴部は直立気味に立ち上がる。外面は底部付近まで煤が付着する。
時期：出土遺物から中世後期室町時代。周溝出土炭化物の年代測定結果の16世紀前半～末の値とも整合する。

SB02　［第８・14図　PL ２・５］
位置：東側斜面のⅡＫ17・22グリッド、３軒並ぶ建物跡の中で中間に位置する。
検出：遺構検出段階で、SB01の埋土と類似した土層が不整形に広がるのを確認し、遺物も散見されたことから建物跡と想定した。不整形でプランが判然としない。
埋土：斜面上部側の西側では厚いが東側にいくほど薄くなる。にぶい黄褐色土の砂混じり砂質土。
構造：建物跡の壁が残るのは西側の斜面上部側のみで、他の辺は削平などのため確認できない。規模は西側壁が不明確となる部分がコーナー付近と想定して南北５ｍ程、東西は地山面が露出し東側に傾斜するため不明であるが、長方形のプランと思われる。西壁はテラス状に段となる部分がある。長軸は等高線に沿うように南北方向を向くと考えられる。床面は黄褐色土の地山面で貼床などはない。
　建物内に炉跡はない。ピットは２基検出された。Ｐ１は径が大きく浅く柱穴とは考えにくい。Ｐ２は直径20～25cm、深さ20cm程で壁が粘土質の堅い土となっている。
　なお、建物範囲内にSK03がある。直接の切り合い関係は確認できなかったが、SK03は平安時代の黒色土器片が出土していることから、SB02がSK03を切ることとなる。
遺物：建物内南西部の床面付近から内耳鍋片７点、土師質皿３点と銭貨が１枚出土した。銭貨は腐食が進み銘は判読できない（PL ５-12）。第14図２は底径24cm程の内耳鍋底部片で、比較的薄手となる。３の土師質皿は、口径９cm程度の小形で、ロクロ成形されやや厚手である。
時期：出土遺物から中世後期室町時代。なお、Ｐ３出土の炭化物の年代測定は７世紀中頃～末の年代が得られ、遺構出土遺物と時期が合わないことから、Ｐ３はSB02に伴うものではないのかもしれない。

SB03　［第８・14・16図　PL ２］
位置：東斜面のⅡＫ12・17グリッド、３軒並ぶ建物跡の中で最も北側に位置する。
検出：遺構検出作業で、地山の黄褐色土面に暗褐色土の広がりとして検出。検出面で遺物も散見されたことから建物跡と想定した。斜面上部の西側中央部には松の根があり、東側は斜面の傾斜のため削平されプランは不明確であった。
埋土：２層に分層され、上部は他の建物跡の埋土に類似する暗褐色土となる。西側の壁際には地山に類似した褐色土が堆積し、壁の崩落土の可能性が考えられる。
構造：建物跡の壁が検出できたのは西側の斜面上部側のみである。規模は南北５ｍ程と想定されるが、東西は比較的平坦となる３～４ｍ程度か。形状は南西部が丸みを帯びるがSB01などと同様に長方形を呈するものと考えられる。検出された西壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は最も深いところで50cm程を測る。床面は地山の黄褐色土面で東側に向かって傾斜するが、建物外と考えられる傾斜面より傾斜が緩い。建物内に炉跡はなく、ピットも検出されなかった。
遺物：建物内南西部の埋土中から中世の土器類がややまとまって出土した。内訳は内耳鍋56点、鉢１点で土師質皿は含まれない。石器は磨石が２点出土している。
　第14図４・５の内耳鍋口縁部は直立気味に立ち上がる。４は環状の耳が付く。６の鉢は厚手の底部から大きく開く。内外面とも部分的に煤の付着がみられる。第16図８は輝石安山岩の長方体の礫を素材とし、


SB01
EP02より
東へ2m
P1
P2
A 797.80
B
C 797.80
D
E F
G H
L=797.40m
1 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性弱、炭化物少混。
0 (1:80) 2m
SB02
EK22
P1
P2
P3
SK03
A 798.00
B
C 798.00
D
E F
G H
I J
L=797.80m
1 にぶい黄褐色(10YR4/3)
粘性弱い、地山の黄褐色土より暗色。
2 にぶい黄褐色(10YR4/3)
粘性弱、炭化物少混。
0 (1:80) 2m
SB03
かく乱
EK17
A 797.80
B
1 暗褐色(10YR3/3) 粘性ややあり、褐色土ブロック混。
2 褐色(10YR4/6) 粘性ややあり。
3 褐色(10YR4/6) 褐色土ブロック主体。
0 (1:80) 2m

第８図　竪穴状建物跡



第９図　掘立柱建物跡

平坦な二面が磨れている。９は深成岩の扁平礫を素材とし、平坦な広い面が磨れている。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。

２．掘立柱建物跡

尾根頂部付近の東側斜面で一棟を検出。竪穴状建物跡より８ｍ程斜面上部の西側に位置する。

ST01　［第９・14図　PL ２］

位置：尾根頂部から東側斜面にかかるＩＯ25、ＩＴ05、ⅡＫ21、ⅡＰ01グリッド。

検出：遺構検出時に地山の黄褐色土上面で平坦な礫が２個確認され、付近でやや浮いた状態でさらに１個の礫が確認された。このことから礫を伴う掘立柱建物跡を想定し周囲の精査を繰り返したところ、柱穴になると推測される落ち込みが確認され掘立柱建物跡と判断した。

構造：尾根の傾斜に合うように主軸が南西―北東を向く２間×３間の建物跡で、桁行約７ｍ、梁行約3.5～４ｍの規模となる。

柱穴は桁行北側列では３間４本の内３箇所は掘り込みがなく、Ｐ１･Ｐ２･Ｐ４は礫を据えたものとなっている。礫は直径10～20cm程度で上面が平坦となっている。北西隅の礫（Ｐ１）は柱穴想定位置からはずれ、遺構検出面の黄褐色土よりやや浮いて出土したが、動いてずれたものと判断した。これら礫は礎板石として据えた可能性がある。途中のＰ３は、直径40cm、深さ10cm程度の柱穴となる。

桁行南列の柱穴は直径40cm、深さ10cm程度でやや方形気味となる（Ｐ６～Ｐ８）。南東隅の柱穴は検出面が削平により下がっていて検出できなかった。

梁行の柱穴も桁行南列と同様で、方形気味で深さ10cm程の掘り込みとなっている。

柱間は桁行で２～2.4m、梁行で２ｍ程を測る。掘立柱建物跡の範囲内には炉や他の施設などは確認されず、建物内の床面も周囲と同じ地山の黄褐色土で硬化面などは認められなかった。

遺物：Ｐ９の柱穴から内耳鍋小片が２点出土したのみである。第14図８は内耳鍋底部片で、外面は底部付近まで煤が付着する。

時期：調査状況・出土遺物から中世後期室町時代。

３．土坑

土坑は16基検出された。分布状況は、尾根頂部の溝跡SD01の周辺に小形のピット状の土坑が５基近接してある。また、東側斜面上部の掘立柱建物跡周辺には円形や方形のものがややまとまっている。他には、斜面を下った竪穴状建物跡の周囲にも幾つか散漫に分布する。大半が遺物を伴わないが、他の遺構の状況や出土遺物から中世のものがほとんどと考えられる。以下、個別に記載する。

SK01　［第10・14図　PL２］

位置：尾根頂部北側のＩＯ23グリッドで、SD01の北側に位置する。

形状・構造：長径100cm、短径75cmの不整円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは10～15cm程度。埋土は上部がにぶい黄褐色土で下部が黄褐色土となる。埋土中から内耳鍋片と土師質皿小片が出土した。第14図７は、直立する内耳鍋口縁部で、口縁端近くでやや内彎する。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。

SK02　［第10・16図　PL２］

位置：東側斜面北側のⅡＫ12グリッドで、SB03の北東側に位置する。西側のSD02との切り合い関係は不明。

形状・構造：一辺200cm程の不整方形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは５～20cm程度。埋土は褐色土が主体で、壁際は黄褐色土となる。埋土中から第16図16の黒曜石製の楔形石器が１点出土した。

時期：出土石器は縄文時代と考えられるが、土坑は他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK03　［第10・14図　PL３］

位置：東側斜面のⅡＫ22グリッドで、SB02の範囲内東側に位置する。

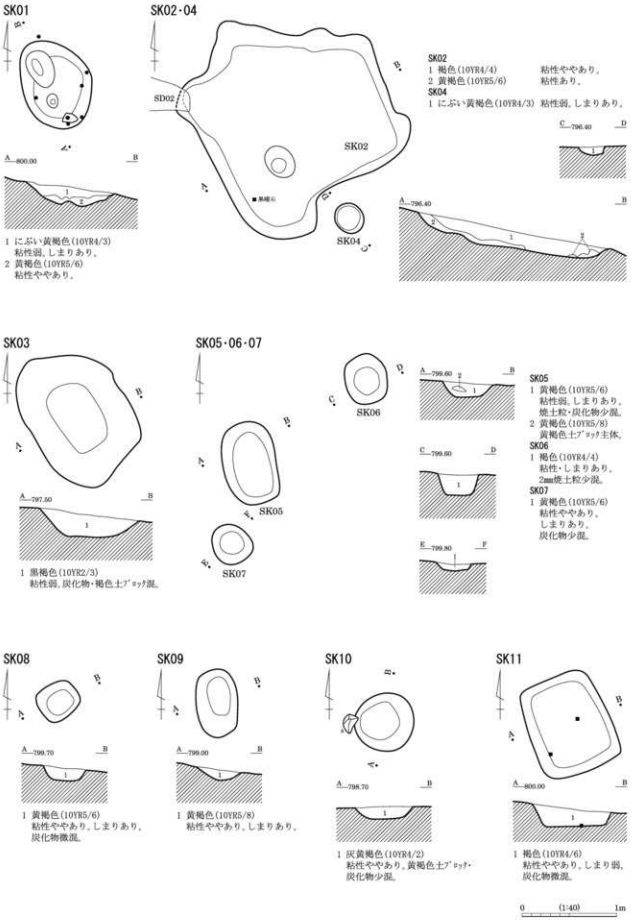
形状・構造：長径150cm、短径100cmの不整円形を呈する。断面は鍋状で、検出面からの深さは15～30cm程度。埋土は粘性のない黒褐色土で、10cm大程の褐色土ブロックが入り、炭化物を含む。埋土から第14図９の平安時代黒色土器坏片が出土。口径16cm程で、内面が黒色処理されている。

時期：出土遺物から平安時代。

SK04　［第10図］

位置：東側斜面北側のⅡＫ12グリッドで、SK02の南側に隣接する。

形状・構造：直径30cm程の円形を呈し、検出面からの深さは10cm程度と浅い。埋土はにぶい黄褐色土で、遺物は出土していない。


SK01
A 800.00
B
1 にぶい黄褐色(10YR4/3)
粘性弱。しまりあり。
2 黄褐色(10YR5/6)
粘性ややあり。
SK02・04
SD02
SK02
SK04
■ 黒曜石
SK02
1 褐色(10YR4/4)　粘性ややあり。
2 黄褐色(10YR5/6)　粘性あり。
SK04
1 にぶい黄褐色(10YR4/3)　粘性弱。しまりあり。
C 796.40
D
A 796.40
B
SK03
A 797.50
B
1 黒褐色(10YR2/3)
粘性弱。炭化物・褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。
SK05・06・07
SK05
SK06
SK07
A 799.60
B
C 799.60
D
E 799.80
F
SK05
1 黄褐色(10YR5/6)
粘性弱。しまりあり。
焼土粒・炭化物少混。
2 黄褐色(10YR5/8)
黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ主体。
SK06
1 褐色(10YR4/4)
粘性・しまりあり。
2mm焼土粒少混。
SK07
1 黄褐色(10YR5/6)
粘性ややあり。
しまりあり。
炭化物少混。
SK08
A 799.70
B
1 黄褐色(10YR5/6)
粘性ややあり。しまりあり。
炭化物微混。
SK09
A 799.00
B
1 黄褐色(10YR5/8)
粘性ややあり。しまりあり。
SK10
A 798.70
B
1 灰黄褐色(10YR4/2)
粘性ややあり。黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ・
炭化物少混。
SK11
A 800.00
B
1 褐色(10YR4/6)
粘性ややあり。しまり弱。
炭化物微混。
0　(1:40)　1m

第 10 図　土坑

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK05　［第10図］

位置：東側斜面上部のＩＯ25・ＩＴ05グリッド。ST01の北西隅に位置する。

形状・構造：長径90cm、短径55cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは10cm程。埋土は黄褐色土で、埋土中から土師質皿小片が１点出土。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。

SK06　［第10図］

位置：東側斜面上部のＩＯ25グリッド。ST01の北西隅付近で、SK05の東側に位置する。

形状・構造：長径50cm、短径40cmの円形を呈する。断面形は鍋状で、検出面からの深さは20cm程度。埋土は焼土粒が混じる褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK07　［第10図］

位置：東側斜面上部のＩＴ05グリッド。ST01の北西隅付近で、SK05の南西に位置する。

形状・構造：直径40～45cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは10cm程と浅い。埋土は炭化物を少量含む黄褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK08　［第10図］

位置：東側斜面上部のＩＴ05グリッドで、ST01の南西隅付近に位置する。

形状・構造：長径45cm、短径40cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは10～15cm程度。埋土はSK07に類似した黄褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK09　［第10図］

位置：東側斜面のⅡＰ01グリッドで、ST01の南東隅付近に位置する。

形状・構造：長径70cm、短径45cmの隅丸方形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは５～15cmと浅い。埋土は黄褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK10　［第10図　PL３］

位置：東側斜面中程のⅡＰ01グリッド。

形状・構造：直径60cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは５～10cmと浅い。埋土は炭化物を少量含む灰黄褐色土。埋土中からは遺物の出土はないが、土坑の縁にかかるように直径15cm程の礫がみられた。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK11　［第10・16図　PL ３・５］

位置：東側斜面上部のＩＴ05グリッドで、ST01の西側に位置する。

形状・構造：長辺105cm、短辺85cmの方形を呈する。断面形は鍋状で、壁が直線的に立ち上がる。検出面からの深さは20cm程度。埋土は炭化物を微量含む褐色土で、埋土中から土師質皿小片１点と磨石１点、底面直上から砥石１点が出土した。第16図４は凝灰岩製の砥石で、全周面を砥面として使用している。上下両端が細くなり、砥面は平坦となる面とすり減って彎曲する面もある。10は磨石・敲石で輝石安山岩の円棒状礫を素材とし、両面が磨れている。両端には敲打痕がわずかにみられる。

時期：出土遺物から中世後期室町時代。

SK12　［第11図］

位置：尾根頂部のＩＴ03グリッドで、SD01の南側に位置する。

形状・構造：直径20～25cm程の円形を呈し、検出面からの深さが35cm程と深い。埋土はややボソボソした褐色土で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK13　［第11・16図　PL ３・５］

位置：尾根頂部のＩＴ03グリッド。SD01の南側でSK12の西側に位置する。

形状・構造：長径20cm、短径10cmの楕円形を呈し、検出面からの深さが30cm程と深い。埋土はSK12と同様で、埋土上部から第16図７の小形の凹石１点が出土した。輝石安山岩製で、直径６cm程と小形で中央部が大きく５mm程くぼんでいる。

時期：土器の出土はないが、中世後期のものと推測される。

SK14　［第11図］

位置：尾根頂部北側のＩＯ22グリッドで、SD01の北側に位置する。

形状・構造：一辺20cm程の方形を呈し、検出面からの深さが35cm程と深い。埋土はSK12と同様で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK15　［第11図］

位置：尾根頂部北側のＩＯ22グリッド。SD01の北側に位置し、SK14と１m程に近接する。

形状・構造：一辺20cm程の方形を呈し、検出面からの深さが30cm程と深い。埋土はSK12と同様で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

SK16　［第11図］

位置：尾根頂部北側のＩＴ02グリッド。SD01の北側に位置し、SK14・15とは２m程に近接する。

形状・構造：一辺20cm程の方形を呈し、検出面からの深さが30cm弱と深い。埋土はSK12と同様で、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、他の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

４．溝跡

SD01　［第11・14図　PL ３・５］

位置：尾根頂部北側斜面のＩＴ02・03、ＩＯ23・24グリッドに位置する。

形状・構造：尾根頂部の平坦部から斜面にかかる地点で、斜面に沿うように東西に延びる。長さ約12m、幅１～1.5mで、部分的にテラス状の段差がみられる。立ち上がりは緩やかで、斜面上部の南側では20～30cm弱の掘り込みをもつが、斜面下部の北側では立ち上がりが不明瞭となる。埋土は地山の黄褐色土よりやや暗い褐色土でやや砂質となる。

本溝跡については、斜面を掘り下げ平坦部をつくった竪穴状建物跡の可能性も考慮したが、長さが長いこと、溝北側斜面の傾斜がきつく、建物跡床面の平坦部が確保できないことなどから溝跡と判断した。

遺物：埋土中および溝北側の斜面からは内耳鍋片61点、鉢１点、土師質皿19点が出土した。他の遺構に比べ土師質皿の出土数が多いが、破片が小片のため同一個体の確認が難しいことも一因と思われる。第14図10・11・13は内耳鍋の口縁部および胴部片で、直立気味に立ち上がり口縁部は薄手となる。外面には多量の煤の付着が認められる。土師質皿は口径が10cmを超えるやや大形の14・15と、９cm以下の小形の16～18がある。いずれもロクロ成形で底部には糸切り痕が残る。12は鉢の口縁部で、口縁が大きく開く器形で、口唇部は平坦となる。内耳鍋に似た胎土となる。

時期：出土遺物から、中世後期室町時代。

SD02　［第11図　PL ３］

位置：東側斜面北側のⅡＫ11・12グリッドに位置する。SB03の北側で、SK02と重なるが切り合い関係は不明。

形状・構造：長さ約2.5m、幅30cm程の蛇行する溝で、西半部は松の根のかく乱の可能性がある。検出面からの深さ10～15cmで、埋土は地山に類似する褐色土。遺物の出土はない。

時期：出土遺物はないが、周囲の遺構の状況から中世後期のものと推測される。

５．土器集中

SQ01　［第11・14・15図　PL ３・５］

位置：ＩＯ19グリッドに位置し、北に延びた尾根斜面が急斜面となる傾斜変換点の急斜面側にあたる。

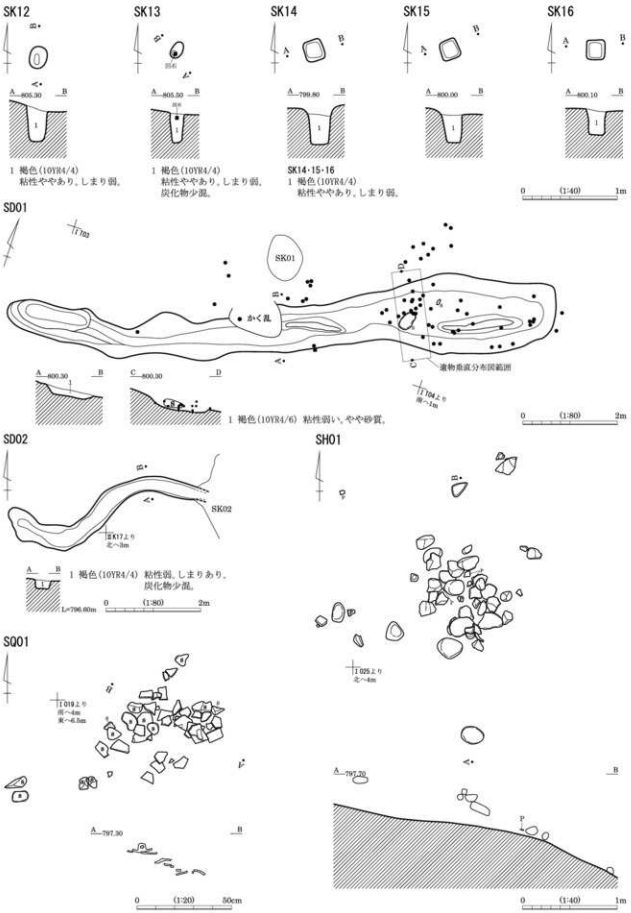
形状・構造：調査着手時の踏査の段階で、急斜面の最上部で地表面に内耳鍋片が散見されたことから精査したところ内耳鍋片がまとまっていることから土器集中として登録した。

内耳鍋片は60×40cm程の範囲にまとまり、地形の傾斜に沿うように表土層上部から出土し、一部は地表面に露出した状況であった。遺物の下部に掘込みは確認されなかった。

遺物：内耳鍋片のみ34点が出土し、一部を除き接合関係があり、概ね５個体分となった。なお、東側に位置する礫集中（SH01）出土のものとも接合関係が認められた。

第14図19は全体の器形がわかる数少ない資料で、口径31cm、器高17cmを測る。薄い底部から直立ぎみに立ち上がり、口縁部との境でやや括れ、口縁部は直立する。口唇部は薄手で平坦になる。外面には煤が付着する。20も同様な器形となる。第15図21・23は環状の耳が付く破片で。22は底部片で、胴部は直立する。

時期：出土遺物は中世後期室町時代のみであるが、地表面に露出した出土状況などを考慮すると、中世以降の畑耕作などに伴い出土した遺物を斜面に廃棄したものかもしれない。



第 11 図　土坑・溝跡・土器集中・礫集中

６．礫集中

SH01　［第11・15・16図　PL ３・５］

位置：ＩＯ20グリッドに位置し、SQ01と同様に北に延びた尾根斜面が急斜面となる傾斜変換点の急斜面側にあたる。SQ01は西側１～1.5mにあり、SH01とほぼ同一レベルになる。

形状・構造：SQ01同様に調査着手時の踏査で、地表面に礫が露出し、そばから中世内耳鍋片などが出土していた。精査したところ礫がまとまっていることが判明したことから礫集中として登録した。

礫は120×80cm程の範囲に集中し、周辺にも散漫に分布する。礫の大きさは20～30cm大程度で、円礫と割礫があり円礫がやや多い。斜面の傾斜に沿うように礫は出土し、下部に掘り込みはなく表土上部から地表面に露出した状況である。礫の間から内耳鍋片５点と擂鉢１点が出土し、内耳鍋片はすべてSQ01の内耳鍋片と接合した。礫の中には石鉢１点と磨石や台石が４点含まれる。

第15図24は擂鉢の口縁部で、口縁直下の内面に縦・横方向の卸目が付けられる。胎土は内耳鍋に類似する。第16図１は多孔質の輝石安山岩を用いた石鉢片で、内側が大きく凹む。11は輝石安山岩の扁平円礫を素材とし、平坦な両面が磨れている。特に上面中央部は顕著に摩耗している。12も輝石安山岩の扁平状の円礫を素材とし、平坦となる面が磨れている。14・15は台石と考えられるもので、長径20～25cm程の輝石安山岩の大形礫を素材とし、比較的平坦となる面がわずかに磨れている。

時期：出土遺物は中世後期室町時代のみであるが、出土状況やSQ01との土器の接合状況を考慮するとSQ01同様に後世の畑耕作などで不要な礫や土器を廃棄したものかもしれない。

７．その他

薬用人参畑跡　［第12図　PL ４］

位置：尾根頂部のＩＳ05、ＩＯ21・22、ＩＴ01～04グリッドに広がる。町教委の試掘調査で低い盛土の高まりが確認され（試掘８Ｔ）、山城に関係する土塁ではないかと想定された範囲にあたる。

形状・構造：一帯は尾根頂部の平坦部にあたり、現状では幅１～２m、高さ20cm程の高まりが東側から北側にかけて確認された。伐採・立木の搬出後、高まりおよびその内部を落ち葉や枯れ枝などを取り除き、地表面の観察ができるように精査を行ったところ、低い高まりは平坦部の縁を囲むように東側・北側・西側の三方向にあり、内部には畝状の筋が10条ほど確認された。現状の地形測量や地表面観察の後、盛土部及びその内部にかけてトレンチを掘削し、遺構や遺物の状況を確認した。

周囲を囲む盛土は、幅1.5m、高さは10～20cm程度である。土層はボソボソした褐色土で、内耳鍋や近世以降の瓦片などを含み、ビニールなども混入している。

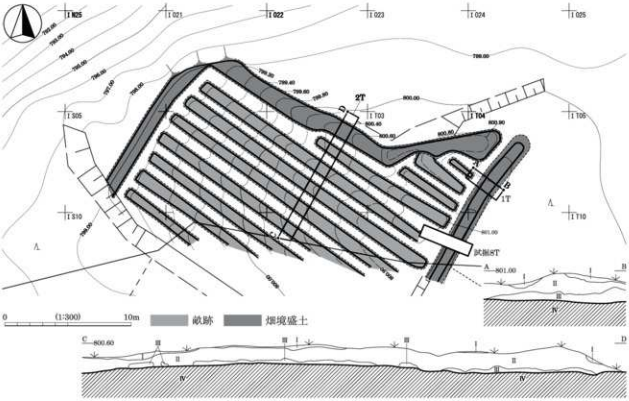
盛土内部でも畝状の凹凸が確認されるのみで、遺構は確認されなかった。畝状の凹凸の土層も盛土と同一で、盛土と畝は同時に形成されたものと考えられた。

調査状況をふまえ、旧地権者に以前の状況を聞き取りしたところ、この場所は昭和40～50年頃まで薬用人参の栽培を行っていて、現在盛土内に確認される畝状のものはその時の名残であること。また畑境には周囲からの根の進入を防ぐため根切りの溝を掘り外側に盛ったとのことであった。

以上の聞き取り結果およびトレンチでの土層確認などから、尾根頂部の平坦部にみられた高まりは現代の薬用人参の栽培跡で、山城などの遺構に伴う土塁ではないと判断した。

また、畑跡の範囲ではその後、重機による表土剥ぎを行い黄褐色の遺構検出面で遺構検出を行ったが、竪穴状建物跡などの遺構は検出されなかった。

時期：調査所見および旧地権者への聞き取りから現代の畑跡と判断した。



Ⅰ　黒褐色(10YR3/2)　耕作土上面に薄く堆積する，表土・腐食土。
Ⅱ　褐色(10YR4/4)　粘性なし，砂混じりでややｻﾞﾗﾂｻする。遺物と共にﾋﾞﾆｰﾙ・缶・ﾋﾞﾝなど混，畑耕作土。
Ⅲ　褐色(10YR4/6)　Ⅱ層に類似，粘性なし，炭化物細粒少混，遺物混，やや明色。
尾根頂部の薬用人参畑跡以外ではⅡ層土と識別が難しい，畑耕作土。
Ⅳ　黄褐色(10YR5/6～5/8)　粘性ややあり，しまりあり，堅くしまるところもある，遺構検出面，明色，地山。

第12図　薬用人参畑跡

西側斜面のトレンチ調査　［第13図　PL４］

面的調査を実施した東側斜面から尾根頂部より西側で、急斜面となる尾根西側斜面にあたる。谷底には小桶沢川が北流し、尾根頂部とは約40mの比高差がある。西側斜面の状況確認では、数箇所でやや平坦部があるようにみえるが、実際その場所に立つと傾斜が緩いだけで平坦部とはなっていない状況である。遺物は面調査範囲直下の斜面上部で内耳土器片が数点採集されたのみで、平坦部にみえる部分や斜面下部側では遺物は認めらない。

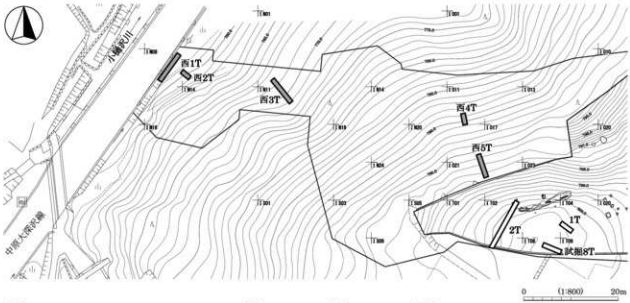
調査は、この西側斜面および西側低位部にかけて５本のトレンチを設定して、遺構・遺物の確認を行った。トレンチは立木の間に設定し、掘り下げは法面掘削作業員によって実施した。

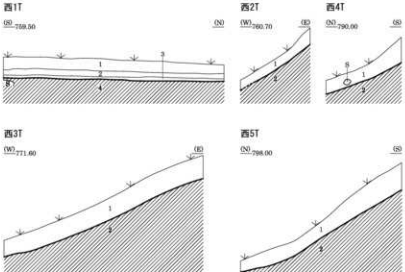
１Ｔ：調査範囲西端の町道中原深沢線に沿った低位部で、ＩＭ08グリッドにあたる。町道の西側には小桶沢川が北流する。トレンチは町道に沿うように長さ７m、幅１mの南北トレンチ。

土層の堆積は地表面から表土（１層）が40cm弱、褐色の水田耕作土（２層）が20cm程、水田下で鉄分が集積したにぶい黄褐色土（３層）が10cm程、地山の暗褐色土（４層）となっている。遺物は出土せず、遺構も確認されなかった。地山には10～80cm大の円礫を多く含む。

２Ｔ：１Ｔの東側で低位部から斜面にかかる場所で、ＩＭ09グリッドにあたる。長さ２m、幅１mの東西トレンチ。

土層は表土（１層）が40cm程堆積するのみで地山の黄褐色土となる。地山面は現況の地形の地形に沿って傾斜している。地山には５～20cm大の礫を含むが大形礫の混入は認められない。遺構・遺物ともなし。





西1T
1 黒褐色(10YR3/2)
表土・腐食土。
2 褐色(10YR4/4)
粘性あり、明黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ混。水田の耕作土。
3 にぶい黄褐色(10YR5/4)
しまりあり、鉄分の集積あり。
4 暗褐色(10YR3/4)
砂質土。粘性なし。100～800mm円礫多混。地山。

西2T
1 黒褐色(10YR3/2)
表土・腐食土。
2 黄褐色(10YR5/6)
砂質土。粘性なし。50～200mm角礫混。地山。

西3T
1 暗褐色(10YR3/4)
2層土主体。黒褐色表土・腐食土混。20～100mm円・角礫混。
2 黄褐色(10YR5/6)
砂質土。粘性なし。100～500mm円・角礫混。地山。

西4T
1 褐色(10YR4/4)
基本土層Ⅱ層に対応。表土。
2 黄褐色(10YR5/6)
基本土層Ⅳ層に対応。50～300mm円・角礫混。地山。

西5T
1 褐色(10YR4/4)
基本土層Ⅱ層に対応。ﾋﾟｰﾙなど混。斜面上部では遺物出土。表土。
2 黄褐色(10YR5/6)
基本土層Ⅳ層に対応。斜面下部側では円・角礫混。地山。

第 13 図　西斜面トレンチ

３Ｔ：北西急斜面の下部でやや平坦になった場所で、ＩＮ 06・11 グリッドにあたる。周囲に比べると傾斜が緩くなっているが平坦ではない。斜面が谷状に窪んだような地形ではないかと思われる。長さ 6.3m、幅１m の南東―北西トレンチ。

土層は２Ｔと同様で、表土（１層）が 60 ～ 70cm堆積するのみで地山の黄褐色土となる。地山面は現況の地形に沿って傾斜していて、削平などによる平坦部の造成は認められない。地山には 10 ～ 50cm大の礫を多く含む。礫は円礫と角礫の両方がある。遺構・遺物ともなし。

４Ｔ：北西急斜面の中程で、周辺に比べやや平坦にみえる場所で、ＩＯ 11 グリッドにあたる。尾根頂部からみるとやや平坦にみえるが、現地に立つと平坦ではなくやや傾斜が緩くなった斜面となっている。長さ 2.3m、幅１m の南北トレンチ。

土層は３Ｔなどと同じで、表土（１層）が 50 ～ 80cm堆積するのみで地山の黄褐色土となる。地山面は

現況の地形に沿って傾斜しており、削平などによる平坦部の造成は認められない。地山には５～30㎝大の礫を含む。遺構・遺物ともなし。

５Ｔ：面的調査を行った尾根頂部直下の急斜面部最上部でＩＯ 22 グリッドにあたる。斜面上部の尾根頂部からみると、調査地は急斜面であるが、トレンチ北端部付近ではやや傾斜が緩くなっていて平坦部がつくられているようにみえる。但し、現地に立つと幅１ｍ長さ４～５ｍ程の範囲で傾斜が緩くなっているだけで、平坦部にはなっていない。長さ5.1m、幅１ｍの南北トレンチ。

土層は北側の４Ｔと類似し、表土（１層）が30～80㎝堆積するのみで直下が地山の黄褐色土となる。地山面はやや平坦にみえたトレンチ北端部を含め、現況の地形に沿った急斜面となっていて、削平などによる平坦部の造成は認められない。地山には５～30㎝大程の礫を含む。トレンチ南端の現地表面直下から少量の内耳鍋片が出土したが、斜面上部から流れ込みか、畑耕作時の廃棄と思われる。遺構なし。

以上、５本のトレンチ調査の結果、遺構は確認されず、遺物も斜面上部からの流れ込みと思われる土器が５Ｔで少量出土したのみであった。このことから、西側斜面から西側低位部には遺構は存在せず、遺物包含層も認められないものと判断され、トレンチ調査のみで調査終了とした。

８．遺構外［第15・16図　PL ５］

遺構外から出土した遺物もほとんどが中世の遺物であるが、１点縄文時代の石鏃がある。

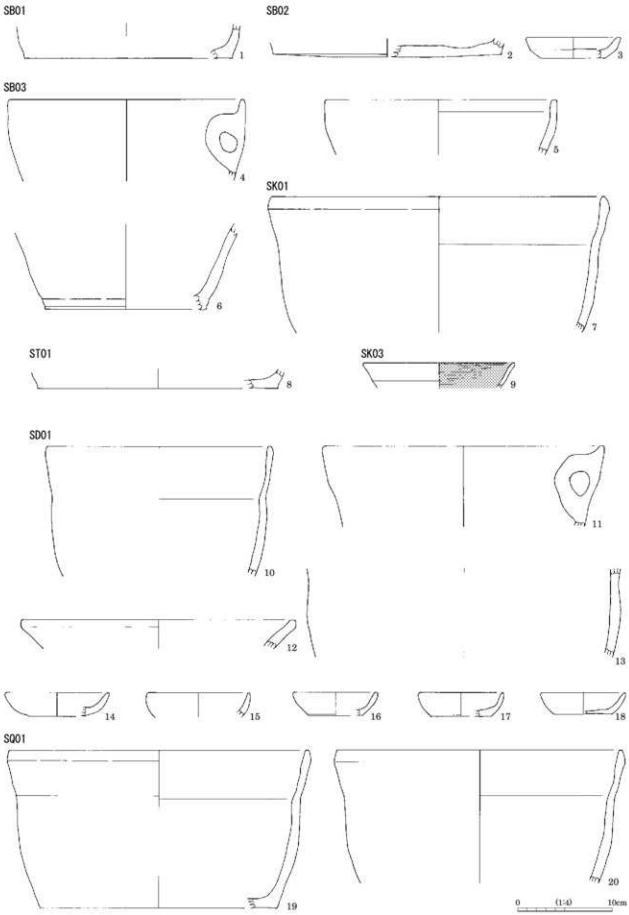
第15図25～29・31は内耳鍋。25は口径26㎝、器高17㎝で、胴部は薄手の底部から直立ぎみに立ち上がり、口縁部との境でやや括れ、口縁部は直立する。26・28・31の口縁部も同様な器形を呈する。27は環状の耳が付く。29は口縁部が外反する器形となる。25・26は外面に煤が多量に付着する。

30・32は鉢。32は、口径28㎝、器高12㎝で、底部から直線的に大きく開く。厚手のつくりで、胎土は内耳鍋に類似する。内面には煤が付着するが、外面には認められない。30も同様な器形で、底部・胴部とも厚手で器厚は１㎝以上となる。内・外の底面には煤が付着し、特に外面底部は多量に付着する。34・35は土師質皿で、34は口径10.8㎝、器高2.5㎝、底部から口縁部に向かい大きく開く。底部には糸切り痕がみられる。35はやや小形で口径8.8㎝、器高2.1㎝となる。

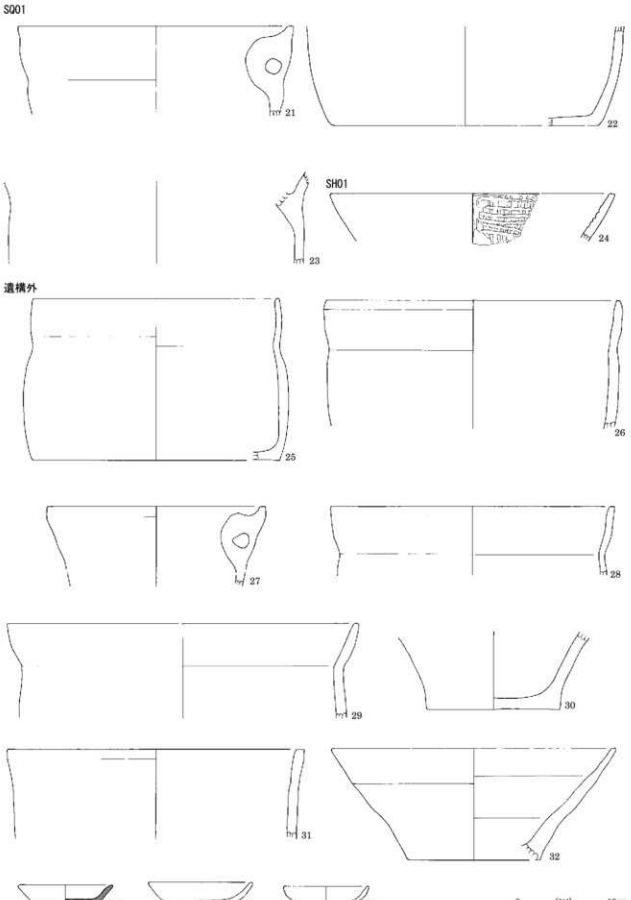
33は新城峰遺跡で数少ない陶器で、大窯の稜皿。直径9.4㎝、器高2.2㎝。内外面に黒色の鉄釉がかかる。内・外の底面には重ね焼きの跡がみられる。これ以外に青磁鎬蓮弁の碗小片が２点出土している。

第16図２・３は石鉢で、いずれも多孔質の輝石安山岩製。２は片口が付き、内面が磨れている。３は口縁端が平坦となる破片。６は凝灰岩製の砥石。長軸８㎝程の小形品で、全周面を砥面として使用し、砥面が湾曲する面もある。

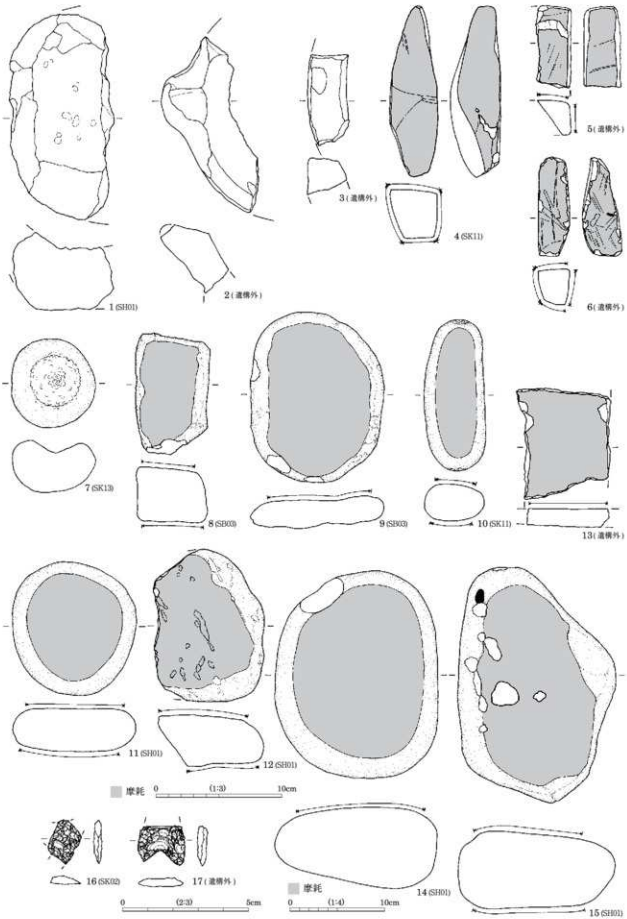
17は黒曜石製の石鏃。中央部より先端は欠損し、基部が大きく抉れている。縄文時代の石器である。



第14図　出土土器1



第15図　出土土器2


1 (SH01)
2 (遺構外)
3 (遺構外)
4 (SK11)
5 (遺構外)
6 (遺構外)
7 (SK13)
8 (SB03)
9 (SB03)
10 (SK11)
13 (遺構外)
11 (SH01)
12 (SH01)
摩耗
0
(1:3)
10cm
16 (SK02)
17 (遺構外)
0
(2:3)
5cm
摩耗
14 (SH01)
0
(1:4)
10cm
15 (SH01)

第 16 図　出土石器

第５章　科学分析

１．放射性炭素年代測定

(1)　分析目的

新城峰遺跡では、中世後期室町時代の竪穴状建物跡が３軒検出された。この建物跡は等高線に沿って並ぶように検出され重複関係もないことから、同時期もしくは短期間に形成された可能性が高い。そこで、建物跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行うことにより、建物跡の存続期間の数値年代データを得るために実施した。

(2)　分析試料・結果概要

新城峰遺跡で検出した竪穴状建物跡の埋土及びピットから採取した２点の年代測定をＡＭＳ法で実施した。資料内容と測定結果は以下のとおりである。

SB01 埋土採取の炭化材（PLD-28252）は、^{14}C 年代が 290 ± 20^{14}CBP で、２σ暦年代範囲が 1521-1592calAD（62.2%）および 1620-1653 calAD（33.2%）となる。これは 16 世紀前半～末あるいは 17 世紀前半～中頃の時期となり、出土土器の年代観と整合するものと言えよう。

一方、SB02 ピット３採取の炭化材（PLD-28253）は、^{14}C 年代が 1340 ± 20^{14}C BP で、２σ暦年代範囲が 649-690calAD（94.2%）および 753-759 calAD（1.2%）となる。7 世紀後半～末の時期となる。この値は遺構の時期とは整合しない。試料を採取したピットが SB02 とは別の遺構と解釈しても、遺跡内からはこの時期の遺構や遺物は確認されておらず、近接する古代の SK03 出土遺物の年代観より古いものとなる。

今回の年代測定では、２点の内１点は調査所見と整合する値が得られたが、もう１点についてはより古い値で、整合しない値となった。整合しない試料については解釈が難しい点もあるが、ここでは中世後期の年代測定の成果として提示しておく。今後も概期の測定資料が増加され、更に検討されていくことが望まれる。

放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (%)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-28582	-32.71 ± 0.26	290 ± 19	290 ± 20	1527-1555　calAD（42.7%） 1633-1648　calAD（25.5%）	1521-1592　calAD（62.2%） 1620-1653　calAD（33.2%）
PLD-28583	-32.72 ± 0.20	1339 ± 18	1340 ± 20	657-676　calAD（68.2%）	649-690　calAD（94.2%） 753-759　calAD（1.2%）

第６章　総括

本報告書は防災・安全交付金（道路）事業、国道 254 号立科町宇山バイパス建設に伴って実施した新城峰遺跡の調査成果である。

新城峰遺跡は当初、遺跡所在の地字名などから中世山城に関係する遺跡ではないかと考えられていた。しかし、調査では尾根頂部にみられた高まりが、現代の薬用人参の畑耕作に伴う盛土と確認され、山城に関係する遺構は検出されなかった。

一方、尾根の東斜面では竪穴状建物跡や掘立柱建物跡などからなる中世集落の一端が検出された。

遺構は尾根の頂部から東側斜面の上部で検出され、斜面が急となる東側斜面下部や北西側急斜面には広がっていない。なお、調査範囲外となる尾根南斜面でも過去に内耳鍋が出土していたことが地元関係者からの聞き取りで明らかとなり、新城峰遺跡の集落は尾根の南側まで広がっていた可能性がある。また、新城峰遺跡周辺には似たような尾根が幾つも存在する。現在では荒れ地となってしまっているが、こうした尾根にも新城峰遺跡と同じような小規模な集落が形成されているのかもしれない。

竪穴状建物跡は３軒が等高線に沿って並ぶように配置していて、切り合い関係もみられないことから、同時期に構築されていた可能性があり、数軒の竪穴状建物跡と掘立柱建物跡からなる小規模な集落が短期間に営まれていたと考えられる。

出土遺物は大半が煮沸具の内耳鍋で、これ以外には少量の鉢と土師質皿がある。内耳鍋はほとんどが同じ形態を示す。すなわち、胴部が底部から直立し、口縁部との境でやや括れるようになり、口縁部は再び直立する器形を呈する。この内耳鍋は、今までの研究から 16 世紀後半に位置付けられるものと言えよう。土師質皿は直径 10cm程度の小形のものが大半で大形のものは少ない。また、陶器は大窯産の稜皿が１点出土したのみで陶磁器類は非常に少ない。

こうした遺物の状況からも、新城峰遺跡の形成された時期は短い期間であったと考えられる。

新城峰遺跡が営まれた 16 世紀後半、立科を含む佐久地域は武田氏が進攻し、武田氏滅亡後には織田氏が進出、さらに織田氏滅亡後は北条氏・徳川氏が進出するなど、不安定な情勢であったことがうかがえる。新城峰遺跡に一時的に居を構えた人々は、こうした戦火を逃れてきたものかもしれない。遺跡南東の山裾に所在する津金寺編纂の「津金寺の歴史」によれば、新城峰一帯の中世津金寺の裏山はアジール（聖域、避難所などの意味をもつ特殊な場所）となり周辺住民などのかけこみ避難所的な場所であったと記載されている。新城峰の集落が形成された要因は特定できないが、当時の人々の生きざまの一端を新城峰遺跡は表わしているのではないだろうか。

新城峰遺跡の調査は、立科町では初めての中世集落の調査となった。今後は考古学的所見だけでなく、文献資料との対比などをとおして立科町を含む佐久郡や東信地方の中世史がより明らかにされていくことを期待し、調査成果が活用されることを望みたい。

引用・参考文献

立科町教育委員会 1990『大庭遺跡』
立科町教育委員会 1994『龍田遺跡』
立科町 1997『立科町誌』
津金寺の歴史刊行会 2009『津金寺の歴史』

写　真　図　版

遺跡全景（真上より）

遺跡全景（西上空より）

遺跡遠景（東より）

調査前の状況（東より）

SB01（北より）

SB02（東より）

SB02 銭貨出土状況（西より）

SB03（東より）

ST01（西より）

ST01 P4 断面（南より）

SK01（北より）

SK02（東より）

SK03（東より）

SK10（東より）

SK11（東より）

SK13（東より）

SD01（西より）

SD02（東より）

SQ01（北より）

SH01（北より）

畑跡調査前の状況（南より）

畑跡（東より）

畑跡断面（南東より）

南壁断面（北西より）

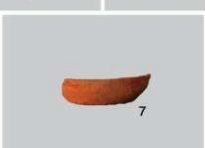
西 5T（北西より）

遺物出土状況（南より）

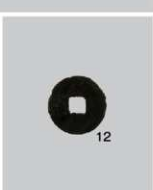
作業風景

法面掘削作業

1　SQ01（14-19）
2　遺構外（15-25）
3　SQ01（14-20）
4　遺構外（15-32）
5　遺構外（15-30）
6　SH01（15-24）
7　SD01（14-18）
8　遺構外（15-33）
(S=1：3)



9　SK11（16-4）
10　遺構外（16-6）
11　SK13（16-7）
(S=1：3)
12　SB02
(S=2：3)



報告書抄録

ふ り が な	あらじょうみねいせき
書　　名	新城峰遺跡
副 書 名	防災・安全交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－国道 254 号立科町宇山バイパス－
シ リ ー ズ 名	長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書
シリーズ番号	109
著 作 者 名	廣瀬　昭弘
編 集 機 関	（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4　℡ 026-293-5926
発 行 年 月 日	2016 年 3 月 18 日

ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発 掘 原 因
		市 町 村	遺跡番号					
新城峰遺跡 （あらじょうみねいせき）	長野県立科町大字山部字新城峰631ほか （ながのけんたてしなまちおおあざやまべあざしんしろみね）	20324	128	36° 16′ 34″ （世界測地系）	138° 17′ 50″ （世界測地系）	20140722 ～ 20141113	4,664	防災・安全交付金（道路）事業 国道 254 号立科町宇山バイパス

所 収 遺 跡 名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
新城峰遺跡	集　落	中世	竪穴状建物跡３ 掘立柱建物跡１ 土坑 16	内耳鍋、土師質皿、稜皿 砥石、磨石 銭貨１枚	

要　約	新城峰遺跡は立科町山部に所在し、周囲を谷に囲まれた尾根上に立地する遺跡である。調査の結果、尾根頂部から東側緩斜面で中世の集落跡が発見された。 検出遺構は竪穴状建物跡３軒、掘立柱建物跡１棟などである。竪穴状建物跡は尾根頂部からやや下ったところに３軒が南北に並ぶように検出された。掘立柱建物跡は竪穴状建物跡より斜面上部の尾根頂部付近で検出され、２間×３間で柱跡に扁平礫を置いたものもある。 出土遺物は少なく、殆どが内耳鍋で少量の土師質皿がある。陶磁器類は大窯の稜皿が１点出土したのみである。他に銭貨が１枚出土した。 検出遺構の状況や出土遺物からみて、新城峰遺跡の中世集落は 16 世紀後半の短期間に営まれた小規模な集落といえる。

平成 28（2016）年 3 月 18 日　　発　行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 109

新城峰遺跡

防災・安全交付金（道路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

国道 254 号　立科町　宇山バイパス

発行者　長野県佐久建設事務所
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926　FAX 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp
印刷者　明和印刷株式会社
〒 380-0943 長野県長野市安茂里 2161-2
TEL 026-226-5311　FAX 026-228-0799